



日本よ
香港よ
中国よ
邱永漢



PHP研究所



〈著者略歴〉

邱 永漢 (きゅう えいかん)

1924年台湾・台南市に生まれる。1945年東京大学経済学部卒業。小説「香港」で第三十四回直木賞を受賞。以来、作家・経済評論家・経営コンサルタントとして活躍。

著書に、「日僑の時代」「商売繁盛 目のつけどころ」「鮮度のある人生」(以上、PHP研究所)、「死に方・辞め方・別れ方」「野心家の時間割」「子育てはお金の教育から」「お金持ち気分で海外旅行」「四十歳からでは遅すぎる」「日本脱出のすすめ」「死ぬまで現役」「失敗の中にノウハウあり」「みんな年をとる」「怒れ、消費者」(以上、PHP文庫)、「ダメな時代のお金の助け方」(文藝春秋)、「香港の憂鬱」「大変動を生き抜く知恵」(以上、小学館)、「中国人と日本人」「わが青春の台湾 わが青春の香港」(以上、中央公論社)、「短篇小説傑作選・見えない国境線」「こちら北京探題」(以上、新潮社)など多数がある。

ファンクラブとして邱友会があり、一般の人たちも参加できる。

住所：東京都渋谷区渋谷1-6-10 邱永漢事務所 (TEL03-3400-9393)

日本よ 香港よ 中国よ

1997年7月25日 第1版第1刷発行

著者	邱 永漢
発行者	江 口 克彦
発行者	P H P 研究所
東京本部	〒102 千代田区三番町3-10 第一出版部 ☎03-3239-6221 普及一部 ☎03-3239-6233
京都本部	〒601 京都市南区西九条北ノ内町11 ☎075-681-4431
印刷所	凸版印刷株式会社
製本所	

©Eikan Kyu 1997 Printed in Japan

落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-569-55735-X

まえがき

いよいよアジアの時代になってきた。日本の対米貿易の黒字が百億ドルをこえた時点で私は日米間で猛烈な貿易摩擦が起こると予想したことがある。ちよつと景気がよくなると、たちまち輸入が増加し、外資準備に警鐘が鳴ることをくりかえしてきた日本で、黒字が一挙に百億ドルをこえるということは、量の問題ではなくて質の変化であり、彼我の経済関係に大きな変化が起こる前兆であるとあわて者の私は早合点したのである。だから実際に一ドル百円になる九年も前の昭和六十一年五月号のウィル誌で一ドル百円の到来を予想した発言をし、為替の専門家たちからデタラメをいうと一笑にふされた。

また共産中国の過去にこだわり、偏見と批判で身動きができなくなつてしまつた経済評論家たちが中国の改革開放政策に否定的で、その成功どころか、破滅すら予言するなかで、私は主義や体制よりもホモ・エコノミクスとしての中国人の本領を見抜いているので、や

がて中国の対米輸出が年間、三百億ドルに達し、対米貿易摩擦の次期チャンピオンとして日本と覇を争うようになるだろうことをいち早く予想した。まだ日本の赫々たる実績には及ばないけれども、既に西の横綱くらいには昇進して三〇一条の対象になり、年々、特惠関税の適用を認めるかどうかで、政治的なかけひきの対象になっていることは衆知の通りである。

また香港返還がいよいよ実現する運びになると、言論の自由や人権問題をめぐって、はたして一国兩制の実験がスムーズに行くかどうか、議論がかしましいが、返還によって香港がゴーストタウンになると予想する人の多かつた一九八九年の時点で、私は香港が大陸の中に埋没するのではなくて、逆に大陸の香港化が起こることを予想したが、八年間に香港の不動産は四・五倍、株は七倍に値上がりをした。ゴーストタウンどころか、バブルの再来ではないかとおそれられるほどの繁栄ぶりを示している。

いずれも十年前には想像もできなかったくらいの大きな変化であるが、問題が全くないわけではない。それどころか、アジアの前途に暗雲たちこめ、いまブームのさなかにあるアメリカと入れかわるだろうと予測する人などあまりいない。しかし、その時期は次第に近づきつつあるという少数意見の側に私は立っている。アメリカの空前の繁栄を前に、日

本は大不況に見舞われて四苦八苦しているし、香港は生活レベルの高い方が低い方の支配下に入ってどうなるのか、不安がられている。また中国は経済成長がほぼ一服して、そのひずみが一挙に表面化しているところでもある。

悲観主義者たちの中にはこれでアジアの一卷の終わりと見ている人も多いようだが、私はいよいよチャンピオン交替の時期が近づいてきたと見ている。いまは経済が沈滞して再起不可能と見られがちな日本だが、私は物を生産して輸出する国から資本と生産技術を輸出する国に移行する生みの苦しみを味わっているところと見ている。また香港は中国の統治下に入ることによって自由と人権を失うのではなくて、中国に自由と人権を持ち込んで、中国が大きく変わる契機になると見ている。一方、中国では国营企業が市場経済に適応できないために最大のピンチにおちいつているが、このピンチを切り抜ける必死の努力をしているうちに、政治体制が経済の発展に適応できる方向に体質改善されて行くと見ている。はたしてその通りになるかどうかは、私が口角泡をとばすよりやがて時間が正しい回答を出してくれるだろう。

この『日本よ 香港よ 中国よ』に収録した三篇の論文は、日本篇がプレジデント誌（平成九年五月号）、香港篇がVoice誌（平成九年七月号）に、また中国篇は日経ビジネス

誌に平成六年から九年にかけて執筆したものである。こうして一冊の単行本になって陽の目を見ることができたのも、これらの雑誌の編集長と、担当して下さった編集者のおかげであり、また出版を引き受けて下さったP H P 研究所第一出版部の今井章博編集長、同中澤直樹さんのご尽力によるものである。あわせて感謝の意を表したい。

一九九七年六月吉日

邱永漢

北京燕沙飯店にて

まえがき…………… 1

I ● 日本経済復活への大提言

四十年前自らを悲観していた日本人……………	11
どん底に沈み再び悲観論の現在……………	15
陽の目をみなかつた「土地の救済」……………	18
不良債権は六十兆円にまで膨らんだ……………	23
そろそろ地価を反騰させる時期……………	26
土地への税金を引き下げる……………	30
縮み志向でうまく「血」が流れない……………	34
デフレの泥沼・悪循環……………	37
黒字減らしはやはり円高?……………	41

II ● 香港返還で中国は変わる

日本人よ外国でも日本でもお金を使え……………	46
消費を生む交際費無税化策……………	49
財政赤字削減より景気回復を……………	52
すべて揃ってあとは住宅だけ……………	56
「住宅スペース倍増運動」のすすめ……………	61
競争で日本企業は強くなる……………	64
アジアを舞台に生き残りを図る……………	69
「一国兩制」とはどういうものか……………	75
旧植民地の目で香港を見るな……………	79
不安感が募る香港人……………	82
五十年不変の本当の目標とは……………	86
疑心暗鬼のなかでの中英交渉……………	89
いま大きく変わっている中国……………	93
イギリス系巨大資本の行方……………	97

III ● 中国の見どころ、泣きどころ

香港に嘯みつかれるのをおそれる中国……………	102
目立ちはじめた「中国の香港化」……………	105
人より資金を大事にするわけ……………	108
香港人にあたえた天安門ショック……………	112
天安門事件は大型台風だった……………	116
中国にとって正しい政策とは……………	120
香港の繁栄を大陸が支える……………	123
一国一・五制から大中華経済国へ……………	127
とりあえず守られた「港人治港」……………	131
ホモ・エコノミクスとエコノミック・アニマル……………	139
治安の悪い国でも皆元気に暮らしている……………	142
外国人の人権もその国の外務省が守れ……………	145
最大の障害は中国の官僚制度である……………	148
物乞いも強盗も「中国流」富の再分配……………	151

中国よ、税法だけは日本に学ぶな……………	154
インフレの抑制より銀行制度の近代化……………	157
所得格差は経済の成長している証拠……………	160
中国は北京と上海だけではない……………	164
対米経済摩擦の舞台は中国に移る……………	167
華僑の対中投資は反省期に……………	170
十二億人市場という神話……………	173
日本と中国、どちらのカントリー・リスクが大きい？……………	176
太子党が矢面に立たされる必然性……………	179
“ポスト鄧小平”はテクノクラートの時代……………	182
中南海が「統一」に執着する理由……………	185
中国の威嚇外交に驚き慌てるな……………	188
日米戦争があっても、米中戦争は考えにくい……………	191
特命全権大使殿、昔とは役目が違います……………	194

装幀…安彦勝博

I
日本經濟復活への大提言



四十年前自らを悲観していた日本人

日本人の大半が日本は駄目だと考えていた一九五四年（昭和二十九年）に、私は六年間亡命生活を送っていた香港を引き払って東京へ舞い戻ってきた。小説家としてできれば筆一本で独り立ちできたらと虫のいいことを考えていたが、もちろん、そんなに簡単にできるとは思っていなかった。しかし、私は悲観していなかったし、日本は駄目だという見方にも同調しなかった。私が見ると、日本の将来には希望が持てた。戦後の中国や東南アジアの混乱した状態に比べれば、日本はマッカーサーの支配下におかれてアメリカ式の政治体制を押しつけられたとはいえ、既に新しい社会秩序ができ、バランスのとれた生産システムができつつあるように、私には見えた。

その年は「濁水溪」という作品を書いて直木賞の候補になったが、梅崎春生、戸川幸夫の両氏が受賞して私は落選した。次の年の下半期に「香港」という作品でどうやら入選して文藝春秋から出頭するように電報をもらった。急いで西銀座八丁目にあった文藝春秋に出かけて行くと、当時、同誌の編集長をやっていた池島信平さんに、「邱さんの作品を一

番推奨したのは、選考委員の先生方よりも先ず僕だよ」と真つ先に恩を売られた。私がお礼を述べると、池島さんは「邱さんのように、台湾や香港の生活を経験してきた人から見ると、日本人の生活はどうですか？」ときいた。

「中国や台湾や東南アジアの政治の乱脈ぶりから見たら、日本は天国みたいなものですよ」と私は答えた。「日本はアメリカのおかげで共産党が合法化され、いまでは左翼主導の労働運動が盛んですが、それとバランスをとるようにちゃんと右翼もいます。国際的に見たら、日本は真ん中より少し右だと思えますが、大半の人々は真ん中へんにいてうまくバランスがとれていますから、アジアの中の天国と言つていいでしょうね」

「日本天国論できまりだ。邱さん、来月の文藝春秋に日本天国論を書いて下さい」

と池島さんは私に有無を言わせなかつた。東京に戻つてきてからずっと考えていたことを私は三十枚の原稿にまとめて池島さんに渡した。池島さんはそれに「日本天国論」と題して、昭和三十一年四月号の文藝春秋に掲載した。

しばらくして何かのパーティで中国文学者の奥野信太郎慶大教授にあつたら、奥野先生に、「邱さんの日本天国論はパラドックスとして読みましたよ」と挨拶された。当時のほとんどの日本のインテリは日本はアメリカの文化的植民地になつてしまった。もうどうに

も仕様の無い地獄だと信じ込んでいた。しかし、私は決して皮肉をこめて日本を天国扱いしたわけではない。日本人は貧しい生活の中で一所懸命働いていたし、その割りに汚職も少なかったし、治安も決して悪くはなかった。

だがその時点では、私はまだ日本經濟の高度成長を予測してはいなかった。私がもしかしたら日本は經濟的に大發展するのではないかと思いはじめたのは三年たった昭和三十四年になってからのことである。漸くヤミ屋全盛の時代が終わって、物をつくることが盛んになり、新しい富が生み出されはじめた頃であった。日本に不足していた食糧や原料を輸入するためには、日本人は少なくともそれに見合うだけの輸出をしなければならぬが、それを超える新しい付加価値はすべて日本国内で日本人の間に分配されて人々の生活を潤おすことに使われた。労働組合の力が強くなって、年々ベース・アップが行われ、それによってふえた収入の中から貯蓄されて再投資にまわされる分を除けば、所得の大半は有効需要となり、物が売れることによって産業界の増産を促す体制ができあがって行ったのである。

この調子で生産がふえ続けければ、日本は金持ちの国になれる。日本人はお金のことをあまり口にしない国民で、就職をしてもらうサラリーでさえ、いくらですかときかない控え

目などところがあつたが、富がふえれば自分らの分け前に関心を持つようになるのはしぜんなことだし、富をふやすチャンスがふえた分だけお金をふやすことにも興味を持つようになるだろうと私は考えた。ならば、文章書きにとつて、お金とか利殖は新しく開拓すべきジャンルである。そう考へて、株の力の字も知らなかつた私が株式投資に手を染めるようになり、やがて株式市場に旋風を巻き起こす成長株理論の提唱者として、株価を左右する「株の神様」に祭り上げられてしまった。

本当のところ、株価を動かしたり、株で個人的に財産をつくつたりするのは、歴史の大きな流れから見たら、大したことをやっているわけではない。お金を儲けたいと思つている人にとつてはその道の達人として羨望の的にされたり、重要な情報源であつたりするが、株で儲かるためには株に対する情報が正確であることも大切であるが、一番大切なのは何といつても国が株価の値上がりする経済環境におかれていくかどうかであろう。

たまたま私の目には日本経済が全体として成長するプロセスにあると映つたし、パイが年々大きくなる中で、分け前にあずかりたいというのならパイのふくれあがる企業や業種が何であるかを探し出すだけで事はすんだのである。景気不景気によつて株価が一時的に下へ行つても、パイの大きくなる間は、ジッとガマンしているだけで株はまた元へもどつ

てピンチを脱することができた。従つて銀行や証券会社が莫大な含み資産を持つようになったのも、経営者のすぐれた先見性もたらしたものでなくて、大きくなるパイの一角を占めていたことの結果にすぎない。個人にしても同じことで、年々、社会的な富がふえ続ける限り、実はうまく立ちまわつて他人より金持ちになつた積りでも環境が逆転して富が縮小すれば、たちまち馬脚をあらわして、先見性など何ほどのことでもないことがばれてしまう。かつての金儲けのチャンピオンたちがここへ来て財産を失うのを見ても成長經濟から成熟社會への環境変化が起こつてゐるからである。環境の変化に対応するだけの能力のない者は、たちまち淘汰される運命にあるのである。

どん底に沈み再び悲觀論の現在

日本の經濟成長は一九六〇年（昭和三十五年）に発足した池田所得倍增内閣からスタートして、ダウ平均が最高の三万九千円をつけた一九八九年の年末までちょうど三十年間続いた。その間に日本は食うや食わずの貧乏国から世界一の國民所得水準を誇る金持ちの國にのしあがった。その原動力になつたのは、資源でも資本でもなく、他國民よりも、より